

「小京都」と「小江戸」

——「うつし文化」の基礎的研究——

松崎憲三

はじめに

一、「ミニ銀座」をめぐって

二、「小京都」をめぐって

三、「小江戸」としての佐原・川越・栃木

結びにかえて

小稿でいう「うつし文化」とは、モデル地域の景観や文化の象徴的部分を移入、再構成し、その上でモデルとなる地域の名を冠したものにほかならない。「小京都・〇〇」、「小江戸・××」、「△△銀座」等々がその代表であり、近年のそれは地域の開発や活性化・観光化とからむケースが多い。ちなみに、「うつし」と言つて我々民俗学徒が先ず思い浮かべるのは、新西国三十三観音霊場（巡礼）、新四国八十八カ所霊場（巡礼）といった地方版霊場（巡礼）である。これらは大モデルを強く意識していることから「うつし霊場」と呼ばれており、「うつし」には「聖地構造の写し」と「シンボルの移し」とが存在する。ちなみに、利根川下流域の新四国霊場（巡礼）に分析を加えた小嶋博巳は、その特徴について

- (1) 霊場Ⅱ巡礼講Ⅱ巡礼行事が不可分の一体を成している
- (2) 霊場および巡礼講・巡礼行事はムラを構成単位としている
- (3) 霊場の全体性が脆弱で、巡礼講が霊場に対して優位にある
- (4) 本尊巡礼化の傾向、さらには巡行仏化の傾向が見られる
- (5) 祝祭的性格をもつ

以上の点を指摘しつつ、「おそらく、各地の地方巡礼に少なからず共通して認められる特徴で

あろう」と述べている。そうして最後に

いわゆる地方巡礼は、確かに歴史の浅い、局地的現象ではある。しかし、それはたまたま特定の宗教学や篤信の信者によって発願されたもので、大巡礼の代替行為として、大巡礼をそのまま縮小した形で実践されてきたにすぎない、というような通念があるとすれば、それは改められなければならない。ここでみてきたように、地方巡礼は地域や時代の諸条件の中で、もはや単純にモデルに帰すことのできない独自の形態と存在価値を培ってきたのである。

と強調して結びとしている。その点は「うつし文化」も同様だろう。それを受容した地域の歴史や民俗と深くかわりつつ維持され、展開をとげてきた筈だからであり、そうした過程を丹念に確認していく作業が必要といえる。

なお、「うつし文化」にかかわる用語に、「コピー文化」、「もどき文化」なるものがある。山折哲雄はこの両者に分析を加え、「コピー」ははなから単純な反覆、一方通行の追隨を母胎にしている」のに対して、『もどき』はけっして『真』に従属するものではなく、また単純に『偽』の陣営に安住するものでもなかった」と述べている。「もどき文化」は文字通り「似て非なる

もの」であり、「うつし文化」はモデルを模範としつつも、それなりの独自性をもって展開をとげたもの、という意味で山折の言う「もどき文化」に近いといえる。しかしながら歴史的にみると、中世までに成立した「小京都」は、風水思想にのっとりながら京都の景観をできる限り「うつし」、またより多くの文化を忠実に模倣しようとした痕跡もうかがえ、それ以降の「小京都」あるいは近代以降の「小江戸」、「△△銀座」のような部分的「うつし」とは異なるものと考えられる。すなわち厳密な意味では、前者を「うつし」、後者を「もどき」と区別することも可能である。いずれにしても、「うつし」あるいは「もどき」どちらから出発したとしても、その後は独自の展開を遂げた、という点では共通している。そのことだけは確認しておきたい。

一、「ミニ銀座」をめぐる

地理学者の服部銈二郎は「霊峰富士山の秀麗さ、千年の東京都の史的年輪、世界の銀座が描きあげた人間の欲望三者三様だが、三つのシンボルには誰も異議を申し立てないだろう。日本中に『小富士』『小京都』『ミニ銀座』など、イミテーションが氾濫することでも真価がわかる」と述べている。⁽⁴⁾

このうち銀座（東京都中央区）は、商店街盛り場として知られているのみならず、歓楽街・業務街・報道街としての機能を合わせ持っている。中央通りと晴海通りの交差する四丁目交差点を中心に、南北一・二キロ、東西〇・七キロといった狭い銀座八丁の範囲に、近代的事業所が一万弱ひしめきあっている。同じく、東京の伝統的な盛り場としては浅草がよく知られており、この浅草が伝統と大衆に支えられた盛り場とすると、モダンや新時代を代弁する盛り場が銀座といえよう。銀座は明治・大正・昭和を通じて華やかに変貌を上げていくが、その輝かしさにあやかろうと、「〇〇銀座」、「××銀座」と冠した商店街が全国に五〇〇余りあって連合会も結成され、情報交換もなされている。

ややデータが古くて恐縮であるが、服部による一九八〇年代初頭の調査によれば、ミニ銀座の正規の数は商工会議所のある町だけでも、四七八商店会を数えるという。お膝元東京が最も多く一二六、次いで関東地方一二〇、中部地方八六、近畿地方三六、九州三二、東北地方二八、中国地方二四、北海道二二、最低は四国地方の一三であり、その分布は長崎・宮崎・沖縄県を除く全国におよぶ。そうして、アンケート調査に回答してくれた八九商店会について銀座街誕生の年次をみると、大正期二、戦前期一、昭和二〇年代三八、三〇年代三一、四〇年代七となっており、本家の東京銀座が隆盛だった時代にその大半が誕生している。一方、銀座街命名の理由については、「一流商店街だから」が四一で、この回答は中心商店街の命名に多い。次

に「東京銀座のようにしたい」「二一」「東京銀座にあやかりたい」「一八と続き、これらの命名はその町の中心商店街でないものに多い。商店街の位置づけに関係なく、「商店会に夢を与えたい」「一七のような夢追い型もあるという。

また、「ミニ銀座」の一つ、東京都江東区「砂町銀座」の当時の様相について、服部は次のように報告している。

東京の下町、江東区の一部に、砂町銀座はある。銀座通りの何分の一だろうか、狭い砂町のメインストリートは、一時日本一を思わせる雑踏に占領される。延長五〇〇メートル、日用品のお店が二〇〇軒近く立ち並ぶ砂町銀座は、毎日午後三時ごろから、買物かごを下げ、子供の手を引いた近所の主婦たちが、「地下水がにじみ出す」ように、団地や露地裏からゾロゾロと銀座街にくり出す。人と人が雑踏する熱気の街に、売り子たちの声、彼女たちのカン高いおしゃべりが交錯して、国電ラッシュ並みの暴様な喧噪さが現出する。砂町銀座の午後三時から四時ごろに見られる、混沌とした活気や熱気は、私の体験では他に類をみない。付近一帯は、町工場や工員さんたちの住宅が交じる住工混在型の地域を構成している。しかも、大工場跡地が大住宅団地に衣更えし、二三区にあっても特異な人口増加区となっている。このことも、砂町銀座の雑踏に関係があるようだ。人を集めて盛るこ

とが盛り場銀座の表情ならば、「砂町銀座」は恰好こそよくないが、典型的な「ミニ銀座」と呼ぶことができよう。

本家の東京銀座は、四丁目交差点にランドマークとしての（和光）時計台があり、主要街路沿いに近代的ビルが林立し、最高級品を並べた店舗がひしめいている。それに比べて「砂町銀座」は日用品を売る店が立ち並ぶだけで、確かに恰好悪いかもしれないが、生活感が深い、活気に満ち溢れていたマチらしく、その様相がいきいきと伝わってくる。東京銀座も、かつては八百屋・魚屋・理容店等の生活関連施設を有し、多様な生活の姿がみられたのである。しかし、一九六〇年代後半以降の高度経済成長とともに都心機能が集中、拡大し、後者の零細な商店街や地場産業施設は消滅の一途を辿ってしまった。そのことはともかく、東京銀座にも浮沈があり、盛り場銀座という視点からみると渋谷や新宿といった副都心盛り場や都市周縁の副々都心盛り場に圧倒されて、高度経済成長期には地盤沈下傾向が強かった。しかし、その復権と再生を目的に、一九六八年には、政府の明治百年事業に乗っかる形で「大銀座まつり」が行なわれるようになり、再び活気を呈するに至った。⁸⁾ こうした中で、全国の「ミニ銀座」はどういう動きを示したのか、そうして現状はどのようになっているのか気になるところであるが、「ミニ銀座」の研究は、服部以降進展が見られないようである。

二、「小京都」をめぐって

今日流行をみているポックリ（コロリ）信仰においても、高松市鬼無の保久俚大権現や、奈良県香芝市・阿日寺の阿弥陀の分霊を祀って新たな宗教施設が誕生するといった例がまま存在するように、かつて広く行なわれていた稲荷社や八幡社といった神社の勧請も「うつし」の端的な事例といえる。その意味で「うつし文化」の伝統は今日に至るまで脈々と受け継がれており、ねぶた祭りや阿波踊り、よさこい祭りの全国的な広がりも、そうした流れの中に位置づけることができる。これらは、マスコミを通じて文化的に全く繋がりのない地域にも広がる、といった情報化時代特有のあり方を示している。これに対して、福岡県の博多を中心に、北部九州各地で行なわれている山笠行事は都市と農村との交流を通じて伝播したものであり、福岡・爾は都鄙連続論の可能性をさぐりつつ分析を試みている。

福岡によれば、北部九州における山笠行事の分布は、廃絶したものまで含めるとその数およそ一〇〇近くにおよぶという。しかも旧福岡藩領、旧唐津藩領、そして幕府領（日田市等）に偏っていて、長崎街道、唐津街道、日田街道、篠栗街道等の宿場町と周辺地域に集中しており、いずれも博多祇園の影響を受けたものと把握している。その上で

玄界灘周辺には、ミヤコという民俗語彙がある。これは「京都」のことではなく、「博多」を指している。杵岐島で、博多に出かけることを「ミヤコに行く」といった具合である。特別な思いで出かける場所がミヤコだったとされる。この語彙と、東松浦郡や唐津周辺の山笠の創始伝承に多く見られる、「京都の祇園を見て始めた」という類の言い伝えを重ね、この「京都」をミヤコと読み替えてみると、博多が身近な「都」文化の発信拠点であつたという認識が見えてくる。

と指摘している。¹⁰つまり、北部九州地域各地の山笠行事は、ミヤコ＝博多への憧憬を原動力として伝播していったものと考えられ、ミヤコ＝博多の背後に、遥かな都＝京都が存在していることが知られるのである。

「うつし文化」の広がり、伝播の問題と関連して興味深いのは米山俊直の「小盆地宇宙論」である。米山によれば、日本の文明がふたつの中心を持っていたのに対して、日本の文化はその地形・気候の多様性を反映して、およそ百の地域単位を持ってきたのではないかという。典型的には、それは四方を山で囲まれた盆地の形をとっている。すなわち、四囲の分水嶺の雨水は、盆地底に集まって一方向に流れる。盆地底には水田が広がり、丘陵部は棚田と畑地、そして山頂へと沢をつめると山棲みの林業・狩猟の伝統を有する人がいる。近世以降は盆地底に城下町がつくられ、そこが人と物と情報の交易地となってきた。このような盆地モデルが、日本

の地方文化の地域単位の典型である。以上のように米山は日本文化の地域単位を「小盆地宇宙」と呼び、その典型として遠野盆地・秩父盆地・亀岡盆地・奈良盆地等々を取り上げて論じている。¹¹⁾

米山のいう「ふたつの文明の中心」とは、古代にあつては九州北部と畿内、中世の鎌倉時代以降は畿内と鎌倉または江戸にほかならない。そうして八章「小京都と文明」の中で、近世以降のあり方に言及して、「この小盆地宇宙の文化は、江戸と上方というふたつの日本文化（この数行後で、「文明の中心」と書き替えている¹²⁾筆者注）の中心から、たえず運びこまれた文化要素を受けとり、それを取捨選別して、あるものを受容し、あるものは選別排除し、それぞれの独自性を育ててきた。また、小盆地宇宙で醸成された文化が、江戸・上方に伝播して、そこでさらに洗練され、各地へふたたび伝播してゆく、という側面もあつた」と述べている。米山の「小盆地宇宙論」は京都を含む上方の文化、江戸文化と地域文化相互の関連（伝播・交流）、地域文化の多様性や個別性を把握しうる可能性を持つものとして評価できる。しかし、残念ながら米山の著書はエッセイの域を出ておらず、現実把握に基づく「小盆地宇宙」の実証的分析をいかに押し進めていくかが課題だろう。

このうち、京都と地方文化との伝播・交流にかかわるテーマが「小京都」論にほかならない。ちなみに、小学館の『日本国語大辞典』には、「小江戸」はもちろんのこと、「小京都」の項目

もない。一方、より一般的な国語辞典『広辞苑』には「小京都」だけが取り上げられており、しかも「古い町並が残り、京都のような趣を持つ小都市」と簡単な説明がなされているにすぎない。⁽¹³⁾ こうしたことから、「小京都」も、「小江戸」同様近年好んで用いられるようになったものではないか、とも推測しうる。「小京都」についていえば、確かに高度経済成長以降、旧国鉄の「ディスカバー・ジャパン」なるキャンペーンが展開されるとともに広がり、市民権を得てきたようである。とはいえ、必ずしも全ての「小京都」が近年生み出されたものという訳ではなさそうである。そのことは村井康彦が『小京都へ』なる著書の中で「小京都は、戦国大名たちが分国支配の拠点として営んだ城下町の出現と同じくしているのである。その点、小京都の実体と特質を明らかにすることは、そのまま室町戦国時代における『領国文化』、ひいては中世文化の理解に資することにもなるであろう」と指摘していることからわかる。ちなみに村井は、引用したような文脈に沿って、越前の一乗谷や山口市を武家的小京都の典型として取り上げているほか、公家的小京都としての土佐中村にも言及している。⁽¹⁴⁾

筆者は、中世文化の理解を直接の目的とはしていない。「小京都」、「小江戸」と称するに至った契機・経緯と、その後のそれぞれの文化の展開・現状の把握を目的とするものであるが、村井の『小京都へ』なる書物は、小著ながら先駆的業績として評価しうる。ちなみに、村井によれば「小京都」たる条件は、

(1) 京都との自然的景観の類似性があげられる。周囲の山や丘陵は、京都の東山・西山あるいは北山に擬せられ、市中を流れる川はそのまま鴨川であった

(2) 基盤目状の町並み、古い民家や寺町通り、それらが醸し出すしっとりとした雰囲気。いわば人為的景観における京都との類似性である

(3) 古都京都と同様、歴史が生み育てた古い伝統——習俗や産業などの保持されているマチ以上三つに集約できるという。¹⁵⁾ (1)は自然的景観の類似であり「小盆地宇宙」とも関連する。(2)は文化的景観の類似性であり、(3)とも連動する。現在「小京都」と銘打つ地方都市は四二ヶ所存在するが、「京都ゆかりのまち」とともに、全国京都会議なるものを結成している。

全国京都会議は、昭和六〇年（一九八五）五月、全国二七市町の参加を得て（京都市も含む）結成されたものである。『京都観光三〇年の歩み』によれば、「京都は平成六年（一九九四）に平安建都二二〇〇年を迎えようとしている。かねてから京都文化の見直し機運が高まっているが、京都にはすでに失なわれたものがあり、失なわれたものは小京都にある、という現実がある。京都、小京都を含めたトータルな見直しでなければ京都の実像はあらわれてこない。この機縁を生かすために、小京都のイメージアップによってこれを果たし、あわせて観光客誘致の相乗効果をはかろうという京都自体の念願がかねてからあった」ことから、各地に散在する「小京都」に呼びかけたのだという。¹⁶⁾ 「小京都」側には冒頭で述べたような「あやかり」願望が

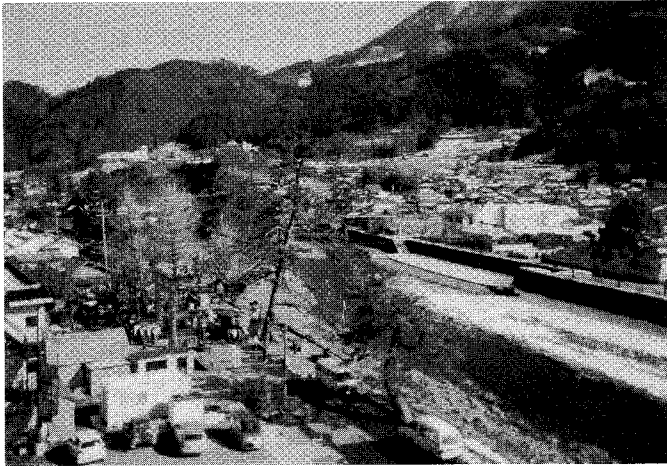


写真1 京都伏見から勧請された稲城神社より望む津和野盆地

あり、また、本家の京都側にもこのような思惑があつて双方の利害が合致し、結成の運びとなつた訳である。

ちなみに、「京都ですでに失なわれたもの」、「小京都にあるもの」で有名なものの一つに、津和野の鷺舞がある。「これは京都の祇園会のもものが山口の八坂神社の祭礼に伝わり、さらに山口から津和野の弥栄神社の祇園会に伝えられたもので、京都のほうでは絶えてしまつていた。それを近年津和野から京都へ逆輸入して復活したものが、祇園祭に登場する」という¹⁷。ただし、「京都文化の見直し」と言つても、文化資源化、観光資源化が主たる目的であり、そのことは「全国京都会議規約」の第二条に「全国各地に所在する京都ゆかりの市町が提携し、広域観光キャンペーンを実施して、各市町のイメージアッ

全国京都会議会員市町入会年度一覧

平成17年4月現在

回	年 度	総会開催地	入 会 市 町				会員数
1	昭和60年	京都市	弘前市 角館町 高山市 上野市 篠山市 山口市 日田市	盛岡市 栃木市 大野市 京都市 竹原市 大洲市 知覧町	遠野市 飯山市 小浜市 龍野市 松江市 中村市	湯沢市 城端町 八幡町 出石町 津和野町 安芸市 (26市町)	26市町
2	昭和61年	京都市	水沢市 足利市 日南市	酒田市 津山市 人吉市	村田町 三次市	加茂市 倉吉市 (10市町)	36市町
3	昭和62年	京都市	小城町			(1市町)	37市町
4	昭和63年	中村市	金沢市	高梁市		(2市町)	39市町
5	平成 元年	山口市	山形市			(1市町)	40市町
6	平成 2年	足利市	松本市	尾道市		(2市町)	42市町
7	平成 3年	高山市	松前町	飯田市	伊万里市	(3市町)	45市町
8	平成 4年	日南市	新規加入なし				45市町
9	平成 5年	小浜市	佐野市			(1市町)	46市町
10	平成 6年	出石町	新規加入なし				46市町
11	平成 7年	角館町	西尾市	那賀川町	甘木市	(3市町)	49市町
12	平成 8年	京都市	犬山市	小川町		(2市町)	51市町
13	平成 9年	犬山市	古河市	萩市		(2市町)	53市町
14	平成10年	佐野市	嵐山町			(1市町)	54市町
15	平成11年	中村市	岩出山町	湯河原町		(2市町)	56市町
16	平成12年	高梁市	新規加入なし				54市町
17	平成13年	湯河原町	新規加入なし				54市町
18	平成14年	日田市	新規加入なし				54市町
19	平成15年	京都市	新規加入なし				53市町
20	平成16年	岩出山町	杵築市				52市町

(退会)

平成12年度 三次市(広島県)／那賀川町(徳島県)

平成15年度 松前町(北海道)

平成16年度 松本市(長野県)

平成16年度 大野市(福井県)

(社)京都市観光協会提供)

ブと観光客の増加を図ることを目的とする」と謳われていることから察することができる。

なお、全国京都会議への加盟基準は、以下の三条件のうち一つ以上あてはまること、となっている。その基準は次の通りである。⁽¹⁸⁾

- (1) 京都に似た自然景観、町並み、たたずまいがある
- (2) 京都と歴史的な繋がりがあがる
- (3) 伝統的な産業、芸能がある

このうち(1)は、村井があげた(1)、(2)の要件に相当する。全国京都会議に加盟している市町は、盆地に立地する地域が多いためか、村井の(1)は自明のこととして、これを謳い文句にしている所は飯田市や高山市だけである。村井が掲げる(2)の文化的景観の類似性を強調する地域が圧倒的に多く、山口市や竹原市は「京都を模した町並み」をウリにしているほか、大野市・飯田市・伊賀市・高山市・豊岡市(旧出石町)等々は碁盤目状の町並みをウリにしている。このほか蔵造りの町並みや商家、武家町(城下町)、さらには寺社の存在をアピールしている地域もある。全国京都会議への加盟基準(2)は村井の掲げる要件には見当たらないが、小浜市(鯖街道)、湯河原町(京都仙洞御所の庭園に敷き詰めた石の産地)等がこれに相当する。また、(3)については村井の要件、京都全国会議への加盟条件と重なるものの、「小京都」側でこれを前面に出している所は割と少ない。アピールが難しいということであろうか。

さて、全国京都会議への加盟市町の推移は表(1)の通りであるが、毎年交流を深めるために持ち回りで総会を開催している。平成一七年(二〇〇五)の第二一回伊賀上野における総会内容から、その活動の実態をみることにしたい。

四月二三日に伊賀上野市の旧崇広堂を会場に開かれた通常総会には、岩出山町・足利市・嵐山町・古河市・湯河原町・加茂町・小浜市・郡上人幡町・西尾市・犬山市・出石町・龍野市・松江市・高梁市・竹原市・大洲市・人吉市・日田市・杵築市・知覧町・京都市そして伊賀上野市の二二市町が参加した。議事は(1)平成一六年度事業報告、(2)同決算報告、(3)平成一七年度事業計画案、(4)同収支予算案、(5)役員改選、(6)次期総会開催地について、以上六項目である。活動内容は、このうち(1)の事業報告を見ればおよそ推測がつくことから、その項目のみを掲げると以下の通りである。

I 共同宣伝事業の実施

- (1) 設立二〇周年記念プレゼントキャンペーンの実施
- (2) 誘致宣伝ポスターの作成配付
- (3) 共同宣伝パンフレットの作成配付

II インターネット・ホームページの運営と情報発信による P・R

- (1) ホームページ掲載データの更新

「小京都」と「小江戸」

- (2) メールマガジンの充実
 - (3) 会員相互間の相互リンクの促進
- III 小京都交流の旅実施
- (1) 郡上八幡食べ歩きなつかしさあふれる日本昭和村の旅
 - (2) 佐野市京都バスの旅
- IV ブロック別誘致宣伝活動
- (1) 九州小京都会議
 - (2) 三古都（京都・金沢・松江）観光開発協議会
- V 京の冬の旅 暁都の賑わい 岫イベントの参画
- (1) 「京の郷土芸能まつり」への参加及び協賛
 - (2) 「京の朝市」への参加及び共催
- VI 小京都観光パンフレットコーナーの運営
- VII マスコミ機関等への情報提供と取材協力
- VIII 会議の開催
- 共同で P・Rしながら観光客を誘致し、また各市町の住民に本家京都や他の小京都への旅を促す、あるいは芸能大会や物産展に相互参加する、等々の事業が主たるものである。全国的

な交流のほか、ブロック毎に交流事業が行なわれていることも知られる。地域間交流に基づく活性化がその目的といえるが、その主眼が観光開発にある点、しかも地域間交流が複数におよぶ点に特徴を見出すことができる。

筆者の目的は、「小盆地宇宙論」の検証を兼ねて、「うつし文化」の展開過程と現状を把握することにあり、当面は津和野市と金沢市をフィールドとして調査を進めたいと思っている。津和野については先に多少触れたが、金沢市は沖積平野に立地する都市で盆地に立地するものではない。しかし、「小盆地宇宙」に対する「平野宇宙」として米山によつて位置づけられており、北九州の福岡などと対置しうるものである。また金沢は、小林忠雄によれば江戸時代前半は京文化の、後半の化政期以降は江戸文化の影響を強く受けた都市とのことであり、^⑩次節で取り上げる「小江戸」文化を考える上でも重要な都市といえる。

三、「小江戸」としての佐原・川越・栃木

『江戸東京学事典』で「小江戸」なる項目を分担執筆した小木新造も、金沢について『小京都』として名高い金沢も『小江戸』とよばれたことが一例みつかっている。この小江戸金沢に関連して、金沢の民家調査によれば一九世紀を境に京都風から江戸風への転換が見られると

いう。この金沢の場合、今後の研究にゆだねられる面が多いが、都市としての中央性が一八世紀後半以降、京都から江戸へ移った可能性を示唆しているのではあるまいか」と指摘している。²⁰⁾モデル都市との交流あるいは緊張関係の中で、どのように「うつし文化」が花開き、展開していったのか、といった課題と取り組む上で、小木の見解はおおいに参考となる。

また小木は、江戸との舟運で繁栄をみた佐原と川越を「小江戸」の典型として紹介した後、先の引用に続く形で、「したがって関東各地の地方小都市で『小江戸』と称した事例が、今後発見される可能性は高いと推測される」と記している。²¹⁾関東地方で今日「小江戸」を名乗っているのは、佐原市（現香取市）・川越市のほか、栃木市と千葉県大多喜町だけであり、小木の予想に反して案外少ない。その他、静岡県磐田市（旧竜洋町）掛塚と彦根市を加えても計六市町を数えるのみである。その理由ははっきりしないが、江戸自身が京都の「うつし」に端を発している、ということがその淵源にあるのかもしれない。たとえば、江戸・東京を「坂と橋の街」というが、九段坂や三宅坂、両国橋や日本橋は、京都の清水坂や四条大橋に比肩され、江戸八百八町に対して京八百八寺が、また色では江戸紫が京紅に対比される。それ以上に何よりも江戸の為政者は、京の寺院建築を模倣することによって、京文化の香りを江戸に移そうと努め、山の手のわずかな起伏を丹念に取り入れ、なんとか京都らしさを表現できた、といった指摘もなされているほどである。²²⁾

理由はさておき、「小江戸」をウリにしている地域は少ないものの、独自性を強調しつつも連携をはかるべく、小江戸サミットなるものが組織されている。加入市町は佐原市（現香取市）・川越市・栃木市の三市であり、「『小江戸』とは大江戸との舟運で栄えた関東の『まち』、伝統の町並みや山車祭りなど、今なお、江戸情緒を伝える『まち』」をキャッチフレーズとしている。小江戸サミットは、平成八年（一九九六）に第一回大会が栃木市で開かれているが、それは栃木市側が他市に働きかけたという経緯があるからである。小江戸とちぎ会代表世話人の青木良一氏によれば、あるテレビ局が栃木市を取材した折、その時の関係者が「ここは小江戸ですね」と発言した。当時の栃木市は「小江戸」といった意識は全くなく、むしろ行政を中心に「小京都」を名乗っていた。これを機に二年間にわたって商工会議所の青年部を中心に勉強会を開き、「小江戸とちぎ会」を立ち上げた上で、川越市と佐原市（現香取市）に声をかけてみた。それ以降「小江戸」をキーワードにして、歴史を活かした活性化を考えることを目的として、三市持ち回りで運営する継続事業として発展させていくことになった⁽²³⁾という。小江戸サミットへの加入条件は、

- (1) 江戸との舟運で栄えたマチであること
- (2) 蔵のある町並みが存在すること
- (3) 山車が出る祭りがあること

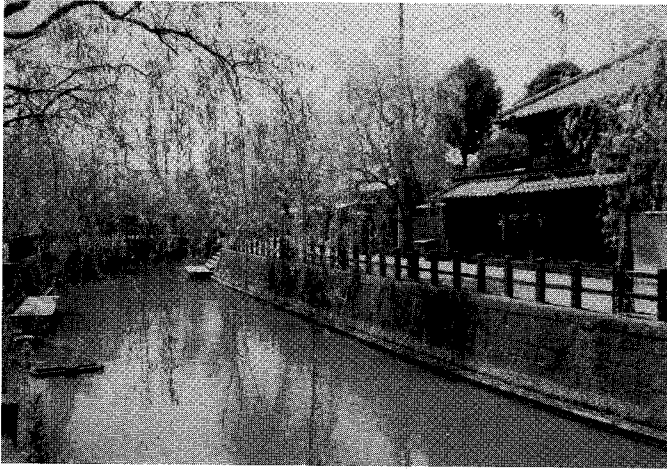


写真2 旧佐原市（現香取市佐原地区）内を流れる小野川

以上三点だという。またサミットの内容は、記念講演（江戸風俗研究家・杉浦日向子「江戸のくらし」、江戸東京博物館々長・竹内誠「大江戸・小江戸」等）、研究者や地元の人々によるパネルディスカッション（たとえばテーマは「小江戸とは」、「歴史的町並みと観光」等）、アトラクションとしてのお囃子や手踊りの上演のほか、お互いの祭りの視察等も行なわれている。また、各市の物産の紹介や販売も実施し、それぞれの市のP・Rも積極的に行なっている模様である。

さて、その小江戸サミットに参加している三都市のうち佐原は、小野川が利根川に合流する河口部に位置する中世以来の港町であり、近世江戸への廻米増大に伴い徐々に河岸も発達し、元禄三年（一六九〇）佐原河岸が公定された。

江戸中期以降、このような利根川水運と結びついた廻米・酒造・商業活動を通じて、下利根随一の河港商業町に発展した。⁽²⁸⁾ 小江戸サミットにおけるキャッチフレーズは、「千葉県の北東部、利根川下流に位置し、小野川が市内を流れる。江戸時代には利根川水運を利用して江戸との交流が隆盛を極め、醸造業が大いに発達した。佐原河岸の当時の賑わいぶりが『お江戸見たけりや佐原へござれ、佐原本町江戸まさり』と唄われた。そのころの文化は、日本初の実測地図の製作者である伊能忠敬によって代表される」以上の通りである。⁽²⁹⁾

佐原の商家の町並みは国の伝統的建造物群保存地区に、また山車行事も国の重要無形民俗文化財に指定されている。観光面では、古くは「水郷・佐原」を謳い文句としていたが近年「小江戸・佐原」を前面に打ち出すようになった。

一方川越は、埼玉県南部、武蔵野台地の北東部と入間川・荒川の沖積平野に位置し、室町期より当地方の中心地として栄えた。徳川氏の関東入部以降も当地方随一の城下町として繁栄し、現在も蔵造りの家並みや時の鐘の塔等から当時の隆盛をしのぶことができる。また、新河岸川の河岸場のうち川越近くに設けられた扇河岸・上新河岸・下新河岸・寺尾河岸・牛子河岸の五つを川越五河岸と称し、江戸と交流するいわば川越の外港として繁栄した。⁽³⁰⁾ 川越は今日蔵造りの町としてよく知られているが、江戸大火後の享保年間（一七一六～三六）に奨励された蔵造りが、この川越でも当時流行したという。しかし、今日までその伝統を継承する契機となった

のは明治二六年（一八九三）の川越大火である。この大火で町全体の三分の一以上に当たる一三〇〇余戸を焼失した。川越商人は日本の伝統的な耐火建築である土蔵造りを採用して町の復興に努めた。川越の蔵造りの多くは、前面に土塗りの戸袋を持ち、屋根は棧瓦葺きで箱棟となっている。棟の両端には巨大な鬼瓦をのせており、現在一番街通りを中心とした一七棟が文化財として指定されているという²⁷。山車が出る川越氷川祭りも近年国の重要無形民俗文化財に指定されたが、これについては三市のそれを合せて、後程若干の考察を試みることにしたい。

川越が、「小江戸」と銘打って観光キャンペーンを開始したのはそう古いことではない。「小江戸・川越」なる名称は、幕末期の藩主・松平周防守康英（一八三〇〜一九〇四）が家臣に「川越は小江戸のように繁栄する土地」と語ったことが現在にも引き継がれている、との説もあるが、観光面で「小江戸」を前面に掲げるようになったのは、昭和五二年（一九七七）頃のようにである。この年皇太子ご夫妻（現天皇・皇后陛下）が川越へ行啓されたことを契機に、喜多院・時の鐘・蔵造りの町並みなどが観光名所として見直された。それとともに菓子屋横丁がマスコミによって取り上げられ、この時期に全国初の「小江戸・川越」をキャッチフレーズに宣伝を強化した。その後平成元年（一九八九）にNHK大河ドラマ「春日局」が放映され、ゆかりの地である川越の観光ブームにさらに拍車がかかった²⁸。こうして川越は、昭和三〇年代半ばの特産品にちなんだ「いも掘り観光」から、「小江戸・川越」へと観光の目玉を移していっ

たのである。そうして昭和五四年（一九七九）に初めて「小江戸・川越」をタイトルにした観光用ガイドブックが発売された。著者の土金富之助氏は昭和四八年（一九七三）に第三代川越商店街連合会長に就任した人物であり、著書のサブタイトルを「江戸文化の残照を求めて」としていることから、本家「大江戸」＝東京以上に「小江戸」＝川越に江戸らしさが残っている、といった認識があつたのかもしれない、その点では本家京都と「小京都」の対応関係についての認識に通底するものがある。

残る栃木市は、既に触れたように昭和六〇年（一九八五）に「小京都・栃木」と銘打って町おこしを始めたものの、平成八年（一九九六）に「小江戸・栃木」と鞍替えした経歴を持つ。他にも例がない訳ではなく、二年間の勉強期間の後の結果であれば、それなりの正当性を持つのだろう。栃木市は、小倉川・永野川などの形成する扇状地の南東、巴波川うすまが南流する平坦な沖積地に位置する。天正一四年（一五八六）から城下町として町立てされたが、慶長一四年（一六〇九）信州飯山城にあつた領主皆川氏の改易により、栃木城が破却されて以後城下町としての性格を全く失い、元和年間（一六八一〜八四）以降巴波川舟運の河岸として物資の集積地となり、また例幣使街道の宿駅として商人町を形成していった。³⁰ 今日でも市内には、往時をしのばせる土蔵や見世蔵が数多く残っている。

なお、山車が出る栃木祭りは五年毎に行なわれるもので、二〇〇六年が当たり年であり、一

「小京都」と「小江戸」

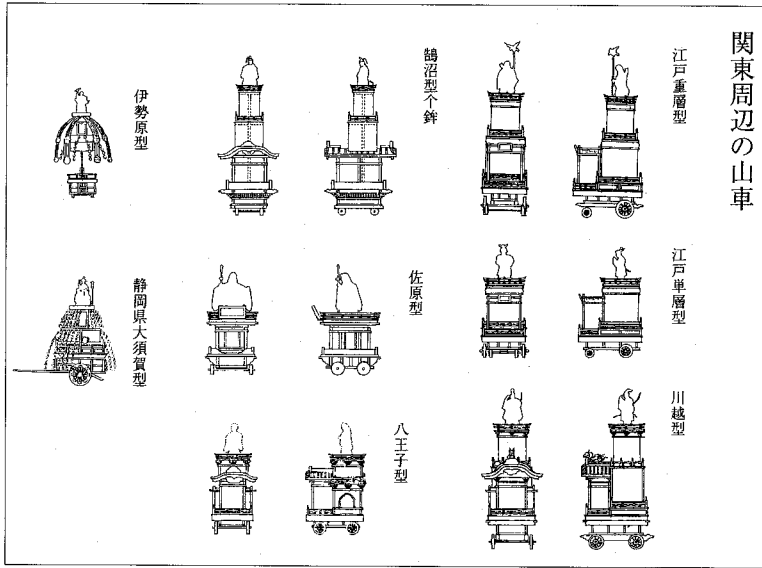


写真3 栃木市の蔵作りの家並



写真4 川越祭

関東周辺の山車



(千代田区教育委員会編『続・江戸型山車のゆくえ』より)

一月一七〜一九日にかけてが祭日である。山車が登場するようになったのは比較的新しく、明治七年（一八七四）に県庁構内で行なわれた神武祭典の時、倭町三丁目が東京日本橋の町内で所有する山王祭出御の静岡前の山車を購入し、泉町が宇都宮から買い求めた諫鼓鶏の山車を賑やかに参加させたのが始まりという。明治一六年（一八八三）以降、神明宮の祭礼に際して山車が出る恰好になり、今日に至っている。現在旧市内に人形山車が八台（万町一丁目・同二丁目・同三丁目・倭町二丁目・同三丁目・室町・泉町・大町）揃っている。これらの山車の多くは江戸型山車と呼ばれるもので、台車の上に屋台付きの二つの層があり、巨大なせ

り出し人形が飾られるというものである。祭り囃子も、栃木県内に伝わる江戸囃子、大杉囃子、日光囃子三系統のうち最もポピュラーな江戸囃子であり、五段囃子と称される江戸馬鹿・昇殿・神田丸・鎌倉・四丁目が演奏されるようである。⁽²⁾ いずれにしてもここで確認しておきたいことは、栃木祭りに江戸型の山車が登場するといっても、近代になって初めて現われたという点である。ただし、山王祭りのそれをわざわざ購入したところに、栃木商人の財力と「大江戸」に対する意識を汲み取ることができる。

対する川越氷川祭りであるが、慶安元年（一六四八）以降紆余曲折を経て今日に至っている。図(1)関東周辺の山車図に示されたように、川越のそれも江戸型と称されるが、種々の絵巻物よりその歴史を辿ると、

（享保三年の祭礼を描いた筆者注）ニューヨーク・パブリックライブラリー蔵「氷川祭礼絵巻」では四角形の箱をベースとし、二本の棒を四人の担ぎ手が担ぐ。ベースは上に竿が立ち、上部に町を示す飾り物がついている。江戸山車の上部は飾りが傘鉾で、下部に吹流しが付置している。一方、文政九年氷川神社蔵「川越氷川祭礼絵巻」では一本柱の上部に跳高欄が付き、柱上部に人形、柱下部の高欄には囃子方が載り、人間の手によって引かれる。この形式は「山王御祭礼之図」にも示され、継承していたと云える。以上の如く、

川越の山車は江戸後期から明治期にかけて現在の江戸型山車に類似し始めた時期とも云えよう

とのことである。³³この点からみると、先の川越藩主の発言もそれなりの意味を持つものといえる。いずれにしても、今日の一〇基の山車は、江戸重層型の囃子台に破風を載せた川越型と称するものである。なお、祭り囃子も幕末から明治にかけて江戸・東京から流入したようで神田囃子系統を中心に、現在三八の祭り囃子団体が確認されるとい³⁴う。

これに対して佐原祭礼は、以上二つの祭りとは趣を異にする。佐原のそれは飛騨の高山祭り同様、同一地域で二つの祭礼を行なうというもので、小野川右岸、佐原本宿の夏祭り（八坂神社の祇園祭り）と左岸新宿の秋祭り（諏訪神社の大祭）がそれである。前者では明和年間（一七六四）から「出し」などが出る賑やかな祭礼となり、後者では享保六年（一七四五）から「家台」が出るようになったとい³⁵う。佐原には現在本宿一〇台、新宿二五台の屋台（訛つてやだい、やでえとい、山車とは呼ばない）がある。その形態は図(1)に示したように佐原型とされ、二層せり出し形の江戸型山車とは異なり、囃子台と露台から成るもので、露台上に巨大な飾り物を持つというものである。

また、下座連（芸座連）と呼ばれる囃子方の団体は、氏子町内の屋台の運行を司る組織と別

個の同好団体であるが（川越も同様）、この地域のお囃子は、佐原を中心に茨城・千葉両県にまたがる形で一つの勢力圏を有しており、それぞれ地名を冠して、佐原囃子の他小見川囃子、潮来囃子、あんば囃子などと呼ばれている。ちなみに佐原囃子の曲目群についてみると、屋台の出発・帰還に際して必ず奏される一連の儀式曲・役物、大通りを静かに進む時などに奏される大曲の段物、民謡や流行歌を取り入れたおおむね軽やかな曲調で、歌や踊りの付く曲を含む端物と大きく三分類され、その多様さが特徴とされている。⁽³⁶⁾

以上現在の佐原祭礼をみると、屋台の構造の上でも江戸型とは異なるし、佐原囃子も江戸囃子とは著しく異なる。三市ともに舟運で結ばれた江戸地廻り経済圏にあって、文化的にも「大江戸」のそれと深くかかわっていた。しかし川越・栃木の祭礼行事が「大江戸」への志向が強かったのに対して、佐原は大江戸の影響を受けつつも独自性を志向したが、その気概は「佐原本町江戸勝り」といった俗謡に窺うことができる。ちなみに、お囃子については利根川対岸の阿波・大杉信仰の影響が大きいものと予想している。

結びにかえて

日本は古くは中国や韓国の大陸文化を、近代以降は欧米の文化を受容しつつ日本的文化を築

いてきた。その意味で元来「うつし文化」の育成に長けていたといえる。国内レベルでも、それぞれに北九州や畿内、あるいは上方や鎌倉・江戸の文化を受容しながら独自の地域文化を育んできた。その典型が「小京都」であり「小江戸」にほかならない。いずれも出発点には雅びた文化、華やかな文化への憧憬と、繁栄にあやかりたいという心意が背景にある。これに関しては「人間本来の模倣欲の然らしむところ」と評する論者もいるが、擬きをモチーフとする「隣の爺譚」の多様さからも肯けるところである。また、その話の内容から「あやかり」願望についても、同じことが言えよう。

今日「小京都」と銘打つ市町は四二余りあるが、「小京都」への志向は古くは為政者の間に存在した。藤原氏による奥州平泉づくり、応仁の乱後京都から下向した公家達による土佐中村づくり、大内氏による山口や徳川氏による江戸の町づくりもその範疇はんしゅうに入る。しかしにわかには増えていったのは、高度経済成長期の旧国鉄によるキャンペーン「デイスカバー・ジャパン」以降といえる。地域側は歴史的風土や文化の観光化、資源化を目論み、訪れる側は日本的なもの、あるいは心の故郷を求めたためである。

一方「小江戸」を名乗る市町の数は「小京都」に比べると少ない。歴史が持つ重みの差が左右しているのかもしれない。いずれにしても、佐原・川越・栃木に限っていえば、幕末から近世初頭にかけて「小江戸」らしさが形づくられたものの、「小江戸」を意識的に売り出したの

は近年のことである。ともあれ「小京都」にしても「小江戸」にしても、モデルと緊張関係を持ちつつそれを模倣し、身の丈に見合った形に整えながら独自の文化を育んできた。「小江戸」に関しても、具体的なフィールドを選定して歴史の変遷を辿り、その特徴を把握するとともに「小京都」との違いを（あるいは類似性を）明らかにしていきたい。小稿は、あくまでそれに至る基礎的作業にすぎないことをお断わりして結びにかえたい。

〔付記〕小稿は成城大学特別研究「地域文化の継承と再創造」（研究代表者・小島孝夫助教授。二〇〇五年～二〇〇六年度）の研究成果であることを付記しておく。

注

- (1) 小嶋博巳「利根川下流域の新四国巡礼〜いわゆる地方巡礼の理解に向けて〜」『講座日本の巡礼第三巻・巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣 一九九六年 二八五〜二九三頁。
- (2) 小嶋博巳「利根川下流域の新四国巡礼」前掲論文 三〇二〜三〇三頁。
- (3) 山折哲雄「方法としての『もどき』〜折口信夫の場合〜」『日本研究』第一集 国際日本文化研究センター 一九八九年 九七〜一〇一頁。
- (4) 服部銚二郎『盛り場〜人間欲望の原点〜』鹿島出版会 一九八一年 一二六頁。
- (5) 松崎憲三「街の飾りと季節感」『人生の装飾法』ちくま新書 一九九九年 一五八〜一六〇頁。
- (6) 服部銚二郎『都市の表情〜らしさの表現〜』古今書院 一九八四年 二〇二〜二〇四頁。
- (7) 服部銚二郎『都市の表情』前掲書 二〇七頁。

- (8) 松崎憲三『地域おこし』としての『大銀座祭り』『現代社会と民俗』名著出版 一九九一年
八〇～九〇頁。
- (9) 松平誠「高円寺『阿波踊り』」～非伝統的祝祭の東日本展開～『三色旗』慶応大学通信教育部
一九九八年 一二～一七頁。阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子「祭の『旅』、『ねぶた』と
『よさこい』」遠征・模倣・移植『旅の文化研究所報告』九号 二〇〇〇年 四一～六三頁。
- (10) 福間裕爾「北部九州の山笠の系譜」『日中文化研究一二・民俗学再生の道』勉誠社 一九九八年
一〇四～一一五頁。
- (11) 米山俊直『小盆地宇宙論』岩波書店 一九八九年 一～二七九頁。
- (12) 米山俊直『小盆地宇宙論』前掲書 二〇四頁。
- (13) 新村出編『広辞苑』岩波書店 一九九八年 一三〇七頁。
- (14) 村井康彦『小京都へ』平凡社カラー新書 一九七五年 一～一四三頁。
- (15) 村井康彦『小京都へ』前掲書 一五～一六頁。
- (16) 社団法人京都市観光協会編刊『京都観光三〇年の歩み』一九九一年 八三頁。
- (17) 米山俊直『都市と祭りの人類学』河出書房新社 一九八八年 一七四頁。
- (18) 社団法人京都市観光協会編刊『京都観光三〇年の歩み』前掲書 八四頁。
- (19) 北陸大学小林忠雄教授「教示」による。
- (20) 小木新造「小江戸」『江戸東京学事典』三省堂 一九八七年 二七四～二七五頁。
- (21) 小木新造「小江戸」前掲論文 二七五頁。
- (22) 服部銚二郎『都市の表情』前掲書 一三八～一四一頁。
- (23) 川越市編刊『小江戸サミット一〇周年記念誌・伝承から共創へ～くらまち小江戸ねっと～』

二〇〇五年 一四〇一五頁。

- (24) 竹内理三他編『角川日本地名大辞典12・千葉県』一九八四年 四一七〜四一八頁。
- (25) 川越市編刊『小江戸サミット一〇周年記念誌』前掲書 一三頁。
- (26) 竹内理三他編『角川地名大辞典11・埼玉県』一九八〇年 二八八〜二九二頁。
- (27) 川越大事典編纂委員会『川越大事典』国書刊行会 一九八八年 二二二頁。
- (28) 川越祭を学ぶ会編『川越祭』街とくらし社 二〇〇五年 九〇頁。藩主の発言に関する史料の有無を目下確認中である。
- (29) 川越市観光協会編刊『小江戸川越観光詳報』一九九九年 一〜一五頁。
- (30) 竹内理三他編『角川地名大辞典9・栃木県』一九八四年 六一〇〜六一一頁。
- (31) 栃木市史編さん委員会編『栃木市史・民俗編』栃木市 一九七九年 六七七〜六八三頁。倭町三丁目の山車は、東京日本橋の伊勢町・小田原町・瀬戸物町の三町共有の山車を購入したもので、嘉永元年（一八四六）製作とされる。下町一〜三丁目、倭町二丁目等では明治二六年（一八九三）に山車を新調している。前者のそれは、万町の有志が東京日本橋本石町の人形師、三代目法橋、原舟月に依頼したもの。倭町二丁目のそれは、栃木町の大工・彫師製作によるものである。
- (32) 池田貞夫・黒崎寿雄編『とちぎの屋台と山車』私家版 一九九八年 一〇〇〜一〇一、一〇〇四頁。
- (33) 川越市教育委員会編刊『川越氷川祭りの山車行事』二〇〇五年 三四七頁。
- (34) 川越市教育委員会編刊『川越氷川祭りの山車行事』前掲書 二七六頁。
- (35) 飯塚好「佐原祭礼の変遷と周辺の都市祭礼」『国立歴史民俗博物館研究報告一二四集・都市の地域特性の形成と展開過程Ⅱ』二〇〇五年 一三〜三〇頁。
- (36) 佐原市教育委員会編刊『佐原山車祭調査報告書』二〇〇一年 八一、八七頁。

(37) 服部銈二郎『都市の表情』前掲書 一三九頁。